

資源開拓の新視点

稲作の心に学ぶ

湯野浜温泉

(株) 一久旅館

桜井 輝夫



消費は美德である。お客様は神様ですと煽られ、その気になつて浪費に浮かれ、あるいは規模拡大に走つたバブル時代を苦々しく思い返している人々。天の岩屋に閉じこもつてしまった千二百兆円の命を、現代天鈿女命を使つてあの手この手で誘い出そうとしているとたとえてよい昨今の政治的施策、商法である。苦々しさの思いは人によつて異なる。

バブル時代、大都市周辺の観光地は団体旅行の押し寄せで大賑わいをした。東京近郊のある旅館経営者が「客は蹴とばしても蹴とばしてもやってくる。国民人口を考えれば二度来てもらうことなど考える必要はない。一人一度でよいのだ」とうそぶいて言つのを呆れながら聞いた。そして今、激震の後のように落ちこんでいる。

落ちこみは悪評を売つた地域だけではない。旅行新聞社主催「プロが選ぶ日本の優良ホテル旅館一〇〇」で連続十八年、日本一に選ばれている北陸・和倉温泉の加賀屋さんを地域のリーダーとする同地も大きく、平成三

年に百六十七万人だつたものが、平成九年には百十三万人(六七・七%)にまで落ちこんで、地域経済に深刻な影響を及ぼしている。入り込みを復活させるにはどうすべきかを官民あげて話し合つていこうという二ページにわたる特集記事が観光経済新聞(四月四日付)に載っている。

近年まで陸の孤島といわれた交通不便な庄内は、旅行ブームの時代も恩恵は少なく、誘客に苦しみ、サービスのレベルアップに励まざるを得なかつた。ブームがあつたといわれなくても振り返つて実感は弱い。ちなみに湯の浜温泉の同期間比は二〇%ダウンである。消費節約は今、うねりとなつて全国を襲つている。かつて傲つた地域には高波になつて、誠実だつた地域にはさざ波で寄せてくれたらとねがつてもその調整は難しそつである。

こんな時代こそ、原点に戻ることだ。

観光客が求めるものは温泉旅館の場合、やすらぎの環境と施設、食べておいしい料理、心こもるもてなしの三点。そこで、訪ねいた

だいたことへの感謝の挨拶、やさしい笑顔と小さな親切の実行を経営者も従業員も心一つになつて努めること。高級であろうとするより、基本の徹底をめざした方がよい。一生懸命が伝わるお客様はほめ、叱りの言葉を通じていろいろ大切なことを教えてくださる。お客様の声に耳を傾け続けた実感であり、事実である。

観光経済新聞社主催、全国旅行エージェンツの投票による「にっぽんの温泉ベスト一〇〇」で県内温泉の全国知名度順位は、あつみ十四位、上山二十六位、天童三十四位、蔵王五十五位だつた。ちなみに全国第一位は青森の古牧温泉、第二位は石川の和倉温泉、第三位は宮城の秋保温泉である。立地不利で昔も今も観光施設は無いにひとしいあつみ温泉が全国上位にランクされる理由は、サービス面の高い評価を背景に「送客よろしく」と多年にわたつて旅行エージェンツに足で売り込み、信頼を積み重ねた結果である。古牧も、和倉も旅館業者が必死になつて売り込んでの



ち、地名も知られるようになったものである。しかし、個の努力の時代は過ぎた。第一次、第二次産業の不振、工場誘致の頻座と観光事業の経済波及効果の大きさ、加えて町づくり、村づくりの核になることが知られるようになって、行政が観光の前線に出るようになってきた。地域振興のための大型プロジェクトをつくり、マスコミを巻きこんでのキャンペーンくらべ。どこも真剣である。

日本交通公社の資料によれば、平成八年にオープンした全国の主な観光施設、立寄りどころの数は二十一箇所。その事業費平均額は八十六億円である。近年分をまとめたら大変な数と規模になるだろう。投資効果の相殺、果たして採算は大丈夫なのだろうか。

人心の荒廃が危機的状態になっている今日の社会が求めているものは、レジャー施設より「心の癒し」「思いやりの心」を育てる場ではないだろうか。

かつての庄内にはそれが豊かにあった。武士、商人、民衆の間人としてのすばらしい生き方、実話の数々。字数の制限上、項目程度しか書けないが、以下列記すると、鶴岡では徳川時代、威令だった幕命、藩主の国替えを領民が命賭けで阻止した「天保お座り事件」。天明の大飢饉に際し下級藩士だった鈴木今右工門の慈善の行為。酒田では藩の財政破綻状態を改善に導き、砂嵐に悩まされた海辺に莫大な私財を投じ砂防林をつくって町の経済と人心を安定させ、やがては日本一の大地主にまでなった本間家三代目当主・本間光丘の功績と生涯。戊辰戦争の際、敵将だった西郷隆盛をやがて「徳の人」として敬愛し、遂には、神として南洲神社を建て、祀り、今日なおその教えを学び続けている人たちがいる。海上交易が盛んだった頃の取引制度「本陣付取引」は、商いの原点である「売っていた」「買っていた」という感謝によって成り立っていたものとして、時代はなれはしているが学ぶべき大切なことではないだろうか。

観光の世界に身をおいて三十余年、実にたくさんの方から貴重な教えをいただいた。最高の教えは篤農家の方からで、「稲作の心」。土づくりの大切さ。良質米づくりも、良い宿づくりも根本は同じということだった。

月山、鳥海山から流れ出た伏流水が、おいしい米、おいしい酒をつくり出したと同じように、

庄内には徳の源流が地下深く流れている。前述の話を、当座の二丁ズに対応する策としてではなく、地域の青少年、住民からも知ってもらい、次に立寄ってくださる観光客からも聞いていただくための「名語部」の育成が必要だ。名作といわれるものは何度聞いても心に感動を呼びおこしてくれる。これを全国の教育関係者に向けて発信し、来庄を呼びかける。ほんとうの観光資源はハードよりソフト。訪れてくださる人々を住民あげてあたたかく迎え、また来てみたいと思っていただけの受け入れ体制をつくることではないだろうか。

全国どこもが観光振興、ハードづくりに躍りになっていく時代、庄内は地域の歴史を深耕して「稲作の心」づくりに学ぶことを提起したい。

桜井 輝夫

湯の浜温泉・(株)一久旅館常務取締役。昭和6年10月1日羽黒町生まれ。温海町湯温海湯之尻。

終戦直前、横須賀より疎開して生活苦を体験。高校在学中結核を患い、丸6年の闘病生活の末、奇跡的に快復。そのあと就職難も体験。昭和33年から39年まであつみ温泉観光協会に就職し町の観光宣伝、誘客に努め、昭和40年からあつみ温泉たちばなやに勤務、昭和58年より支配人となり、その発展に努め平成3年1月退職。同年8月、庄内空港内レストランの店長となり1年9カ月勤務。この間休日を利用して旅館時代の体験記「言葉じゃないよ心だよ」を現代旅行研究所より出版。若い時の大病と失業苦が健康で働けることのありがたさとうれしさを体にしみこませてくれ、同時にレストラン勤務の比較から張り合いの大差を痛感し、再度旅館の現場に戻って良質の宿づくりを手伝い中。

